

基調講演

## わたしのメディア表現学宣言 ― 機械とわたしの未来 ―

The Media Creation Manifesto: Machines and My Future

三輪 眞弘 (作曲家、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 学長)

MIWA Masahiro (IAMAS)

### 1 「自然・人間・機械」間のコミュニケーションを考える

現在、私たちは人為的なエネルギーに支えられた高度なテクノロジーの中で生きています。それなしでは、もはや人類の全員が地球で生きていくことすらできないような状況です。人類を支える、そのような人工的なシステムやそれを可能にする様々な装置のすべてをここでは「機械」と呼ぶことにします。

「メディア表現学」における「メディア」とは何か。それは、“人間にとっての、人間を含む、この「機械」の環境”のことだと言えるでしょう。つまり、「メディア表現学」は、この世界が自然や人間だけでなく、「機械」を含むことを自明とし、その規模や影響力から、「自然と人間と機械」相互のコミュニケーションの「設計」無しには成り立たなくなった、地球生態系の未来を模索する学問であると、私は考えています。

その際、メディア表現学は、森羅万象をシステム間の関係として記述する「システム論」を踏まえ、その前提となる「メディア」に注目します。なぜなら、メディアは透明な「通信手段」などではなく、必ずメッセージの「内容」を形式化する、あるいは生み出すもので、すべてのコミュニケーションに関わる根本的な概念だからです。つまり、メディア表現学は、人間がこの宇宙の森羅万象を知覚し認識し、参加する形式として、「メディア」を捉え、「自然と人間と機械」をめぐる相互の関係を、来るべき「メディア論」において、統一的に捉えることを目指すものです。

### 2 「機械」＝「道具」を使いこなすことではなく、共存を問うこと

飛躍的な進化を続ける先端技術は、社会と人間存在そ

のものを変えつつあります。それらは、もはや「人間が使う便利な道具」という領域をはるかに越え、それらの持つ意味や価値は、今までの倫理や哲学では測り得ない領域に達しています。ですから、高度なテクノロジーに全面的に依存しながら生存を続ける人類は、人間のために、「道具」をいかに倫理的に使いこなすのかではなく、それらと、どのように「共存していけるのか、そして、それは可能なのか」を問わなくてはなりません。つまり、「人間のための世界」は言うに及ばず、「自然のための世界」、「機械のための世界」が互いにどのように同期し、協調しながら、この地球上で共存できるのかを模索することこそが人類に求められている課題であり、それこそが「メディア表現学」を、いま、掲げる理由なのです。

### 3 「表現」における領域横断的な知性を「アート」と呼ぶことにしよう

わたしの考えるメディア表現学では、互いに異なる学術分野の知見に基づく多様な実践、つまり、従来の学問一般を「表現」と言い換えてみようと思います。私たちが世界を知覚／認識し、それに応答することは、数式であれ、思想であれ、社会活動であれ、すべては人間による「表現」であるはずで。近・現代の表面的に細分化された学問分野の羅列を、このように「表現」として統一的に捉えることがメディア表現学的態度であり、それは、学問の領域横断による「再統合」を目指すものです。

この「統合」において、メディア表現学では、「アート」という言葉がキーワードになります。「アート」の語源である「ars」が、技法や技術を意味していたように、ここで言う「アート」とは、人類が未来に存続するための「知の技法」、あるいは知性の「統合力」のことに他なりません。ただし、それは、「機械」を含むこの世界

を前提としているという意味において、従来の「工学」に限りなく近いものに見えるかもしれません。

#### 4 ベイトソンによる「優美」(grace)の定義

わたしが、メディア表現学の「表現」を「アート」と呼びたい理由は、そこに「優美さ」(grace)という概念が必ず伴うと考えているからです。この「優美」という言葉は、コミュニケーション理論、特にサイバネティクスを様々な学問領域に展開させたアメリカの文化人類学者、グレゴリー・ベイトソンの「アート」の定義によるものです。つまり、「知の技法」、あるいは知性の「統合力」とここで言うとき、それは意識化され、問題解決的で、合理的な「理性」だけではないことを、ベイトソンの思想に倣って断わるためです。

すなわち人間は、常に合理的・論理的判断のみによって行動しているわけではなく、むしろ古今東西に生きる、あるいは生きた誰もが、みずからも意識化できない内的な欲望や感情、技能あるいは習慣や慣習に従って生きるしかない存在だからです。言い換えれば、「わたし」は、みずからの置かれた環境との「関係」において、刻々と変化する生きた「意味世界」に対して応答し、みずからをも更新していく存在であり、それは地上のすべての生物に共通です。

#### 5 知性の根源にある横断性によって理性を統合する

こうした前提の上で、「優美さ」を捉え直してみましょう。「優美さ」とは、まず、個人の気まぐれな「感じ方」の問題ではありません。「自然で無駄のない」あるいは「宇宙の摂理を直感させる」・・・などを示唆する、古今東西の人類、誰もがすぐに意味がわかる、普遍的な概念です。言い換えれば、それは、もっとも統合的な認識でさえあるでしょう。

つまり、「優美さ」あるいは「おぞましさ」などの概念を支える人間の「感性」一般は、人間の「理性」の対極にあるわけではなく、これと無縁どころか、それをもって現に数学的な予想が証明され、宇宙スケール以上、量子スケール以下の物理的理論が構築されていることを思えば、「優美さ」つまり「アート」こそが、領域横断的な知性として立ち現れてくることが必然であると思われます。また、それは、メディア表現学の理想というより、

学問の根本を支える、ある種の指導原理なのであり、人間のイマジネーションとクリエーションとしての「そうぞう力」の起源に深く関わるものであると、わたしは考えています。

#### 6 一人称の「わたし」(I myself)による「分断」の克服

しかし、このような理解が社会に共有されているとは言い難いかもしれません。つまり、人文学と社会科学、自然科学、さらに細分化された学術領域の「分断」、すなわち、互いの深い関係性に対する無知や無関心だけでなく、産業や政治など実社会と学問領域全体との分断が、絶望的なまでに相互の協働を阻んでいるのではないのでしょうか。その「分断」が、互いの価値や使命を互いに無力化しているのではないのでしょうか？さらに、それが、環境破壊や核武装など、人類が直面する幾多の危機に対する、望み得る最善の判断を私たちがいつも取り逃がしてきた理由だと感じるのをおかしなことでしょうか？

言い換えれば、この分断によって、死者の願いや無念に耳を傾ける「わたし」や「私たち」の子供たちへの責任や希望が、現実社会における重要な場面において一切配慮されてこなかったことにこそ、今私達は気づくべきなのではないのでしょうか。それは、研究者たちだけでなく、あらゆる「社会人」が、社会の問題を一人称の「わたし」から分離し、「わたし」を抑圧し続けてきた、この、きわめて不自然な状況を私たちが社会の「常識」として教え込まれてきたからだとは思いますが。

なお、ここで言う“一人称の「わたし」”とは、決して「自我」、すなわち「エゴ」のことではなく、「わたし」の中に他者の声を聴き、「優美さ」の指導原理にみずからを委ねる、「世界」を映し出す鏡としての、内なる「わたし」のことです。また、その「他者」とは、人間だけでなく、自然でも、機械でもあるはずで。そして、ここで述べた社会の様々な次元における「分断」を私たちの知性が本来持つ「横断性」によって克服し、人間と世界との調和のとれた関係性／全体性を恢復することこそを、政治や、産業からでなく、メディア表現学という学問の領域から率先して試みるべきだと、わたしは考えるのです。

#### 7 「実践」の規範としての「デザイン＝設計」

人間の思考や学問は、「そうかもしれないが、そうで

はない世界、あるいは、そうではない説明もあり得る」という可能性を考え抜く営みであり、人類は、そのような思考の多様性を担保することで滅亡の袋小路から救われてきたはずです。

いま、学問に求められていることは、諸学の深化はもとよりですが、実社会／地球生態系に向けて世界に働きかける「実践」です。そして、メディア表現学の「実践」の規範となるものこそが「設計」、すなわち、デザインです。

デザインは、まさに「機械」の本質として、元来「領域横断的」なものであり、様々な思考や価値観のみならず、産業や政治も含む、実社会のモノやコトを洞察し、真の問題を発見し、具体的な表現にしていって創造活動です。それはまた、究極的には、最初に述べた「自然と人間と機械」相互のコミュニケーションの設計へと向かう運動そのものです。メディア表現学が考えるデザインは、単なる意匠や「問題解決のための手法」ではなく、諸学の理論と実践を縦横に結び、物事の新たな関係性を生み出す、しこう：「考える思考」と「ためす試行」のプロセスとして、認識と実践を結ぶ中心的な概念なのです。

## 8 メディアアートという特異点

その一方で、「メディアアート」は、「わたし」と「世界」との関係性を「作品」として結晶化させる実践を伴う世界認識の方法として、有史以来の「芸術」に連なる人類の普遍的な営みであると同時に、メディア表現の中では、それが本源的だからこそ、特異な領域とも位置づけられるでしょう。それは「わたし」にとって常に切実なものであるがゆえに、決して通俗的な「理想の世界」を夢見るものではなく、むしろ、この過酷な現実世界を直視すればこそ、多くの場合、「自然と人間と機械」のいびつな関係を露わにする批評的、あるいは救済としての「表現」であるかもしれません。ただし、その創造、あるいは、表現を支えるものは、他のすべてのメディア表現同様、「優美さ」という指導原理であることに変わりはありません。

ここではメディア表現におけるデザインと、このメディアアートとの関係については話せませんが、いずれにせよ、この「メディアアート」が、未来の人間社会における「芸術」の形であり、美術や音楽などをはじめとする従来の芸術領域を解体し、異なる形で再統合する唯

一のものとなるに違いないと私は考えています。

## 9 新しい「学びの場」をデザインする

「メディアアート」は、身体性に基づく一人称の「わたし」と「自然と人間と機械」との関係性を基本とすることから、さらに「教育」と呼ばれる、メディア表現学においても重要な活動領域に直結します。

たとえば、人間の幼少期における言語の獲得に加えて、子供たちの自我と環境との関係からなる人格形成に、機械、特に視聴覚を伴う高度なメディア技術などが人類史において未知なる影響を与え始めているであろうことは想像に難くありません。あるいは、スマートフォンに代表される情報端末は、何より「拡張された知覚器官」として、子供たちのみならず、未来のすべての人間の身体の一部であり続けるでしょう。そのような環境の中で育ち、生活する私たちは、地球規模で結ばれた「機械」、つまり情報システムを前提とし、新しい「世界の見方」、すなわち「生き方」を学ぶ以外にないはずで、それを「学ぶこと」は、子供に限らず、いまを、そして未来を生きるすべての世代にとって不可欠なことでしょう。

たとえば、冒頭に述べた「機械」＝「道具」という思考モデルは、単に、現実在即していないというだけでなく、この世界が「人間のため」にあり、その他のすべては「利用される」ために存在するという、誤った「メッセージ」の「思想教育」の結果だとさえ考えることもできます。メディア表現学では、そのようなメッセージへの洞察はもとより、教育のあり方自体も追求されなければなりません。つまり、誰かが一方的に教え込むのではなく、みずから学ぶ、新しい「学びの場」の設計です。

## 10 「自然と人間と機械」世界をデザインする態度としてのメディア表現学

「他人を傷つけてはならない」という道徳的な教えは、「教わる」ことによってではなく、自分自身で気づくことによって初めて理解されるように、一人称の「わたし」と「自然と人間と機械」との関係性を「わたし」が感じ、考え、気づき、さらに世界へ応答していくエクササイズとして「教育」を捉え直すこと。さらにそれは、何かのための「手段」としてではなく、みずからの身体を伴うその実践自体が「世界」との関わりそのものであるよう

な経験こそ、メディア表現学が理想とする「学び」の姿であり、また、それはメディアアートの定義そのものでもあります。「教育」はもとより、メディア表現学が目指す多様な「表現」は、本来、「優美」なものであり、その「優美さ」を支えるのは常に、一人称の「わたし／私たち」の感性です。それが、理論だけでは説明不可能な、様々な実践における身体化された「技法」、すなわちメディア表現学が謳う「アート」に他なりません。

来るべき「メディア論」に基づく「知の技法」、ある

いは知性の「統合力」としての「アート」によって「自然と人間と機械」による世界をデザインする、多様かつ真摯な姿勢こそが、新しい学問としてのメディア表現学的「態度」なのです。

Thank you!

三輪眞弘 2017/7/28

用語説明：

【機械】地球上の人造物による自律的なシステムとその構成要素

【メディア】人間にとっての、人間を含む「機械」の環境

【メディア論】世界把握の理論的枠組み

【表現】人間による諸活動の結果

【アート】「優美さ」(grace)を伴う領域横断的な知性とその技能

【一人称の「わたし」】「わたし」の内に他者の声を聴き、「優美さ」の指導原理にみずからを委ねる、「世界」を映し出す鏡

【デザイン】設計。創造性に基づく実践のための規範

【メディア芸術】「わたし」と「世界」との関係性を「作品」として結晶化させる実践／世界認識の方法

【教育】「自然と人間と機械」との関係性を「わたし」が感じ、考え、気づき、さらに世界へ応答していくエクササイズ